

総合科学研究会報

第4号（2006年9月）

本号について

私たちは1昨年、誰もが自由に参加できる研究会として「総合科学研究会」を発足させました。
1昨年度に続いて、昨年度も都合4回の勉強会を開くことが出来ました。

この『総合科学研究会報』第4号は昨年度開いた後半2回分(第7回、第8回)の記録です。前半2回分(第6回、第7回)については、本年1月に発行した『会報』第3号を御覧ください。

第7回（2005年11月21日）：志賀令明氏（看護学部総合科学部門 心理学）、「現代の子ども達のこころ」（本『会報』では、「こころとの出会い こころが心として機能するために」に改題）

第8回（2006年3月22日）：清水研明氏（医学部外国語講座）、「対照修辞論（contrastive rhetoric）について」（本『会報』では、「対照修辞論（contrastive rhetoric）について—英語と日本語の対照を中心に—」に改題）

なお、第9回の勉強会は医学部生物学講座の西山学即氏をお招きして、本年6月22日に開催いたしました。来る10月には医学部外国語講座の田中明夫氏をお招きして、第10回の勉強会を開催する予定です。その様子は、次号で御報告いたします。

こころとの出会い こころが心として機能するために

福島県立医科大学 看護学部
総合科学 心理学
志賀 令明

1

最近の子ども達で報道されていること

1997年の酒鬼薔薇聖斗事件以来、中学生から高校生の「犯罪」が報道されることが多い。

最近では、福島商業の模造日本刀事件、女子高校生の母親毒殺未遂事件、16歳の男子生徒による同級生殺人事件など、「凶悪事件」が多いが、彼らは社会心理学的に非行進度が高いわけではなく、これまでの非行少年がたどってきた道のりとは違った背景で犯罪を起こしているのが特徴である。

2

従来、少年非行は反社会的なサブカルチャーへの水路づけで説明された

人は発達の途上で社会に通用している価値基準である文化に水路づけられながら成長するが、社会には多くのサブカルチャーが潜在し、そのサブカルチャーに沿って生きることが快楽と認知される場合、非行や犯罪に結びつくことも多かった。

1970年代以降の日本では価値規範が多様化し、特に90年代以降はネット社会のもと、犯罪や非行に至るまでの垣根が低くなった。

3

1950年～1960年代の生活を考える

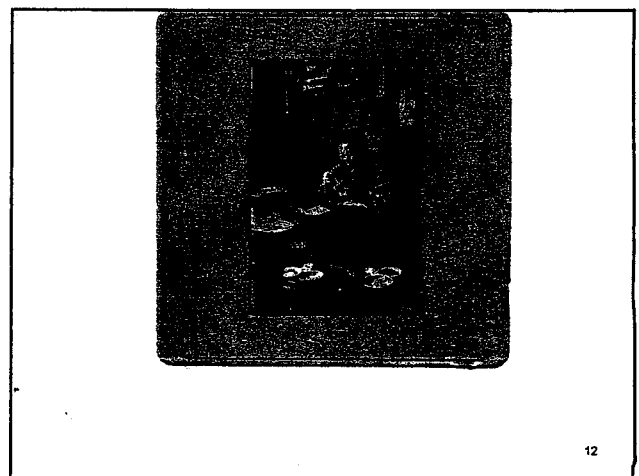
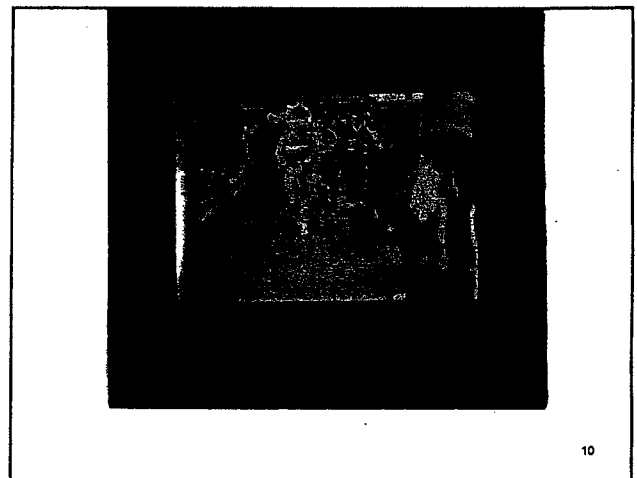
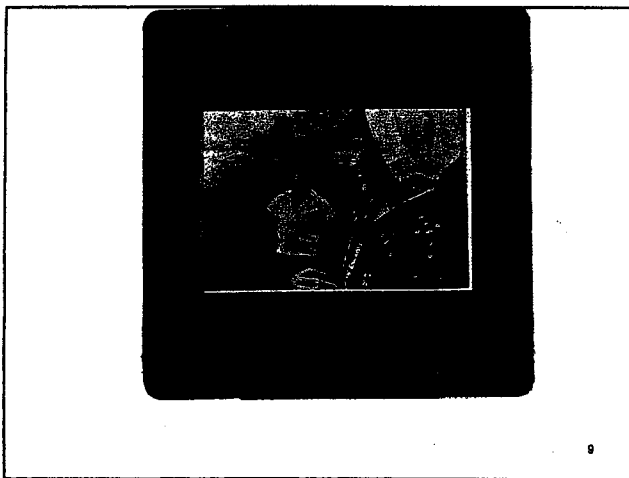
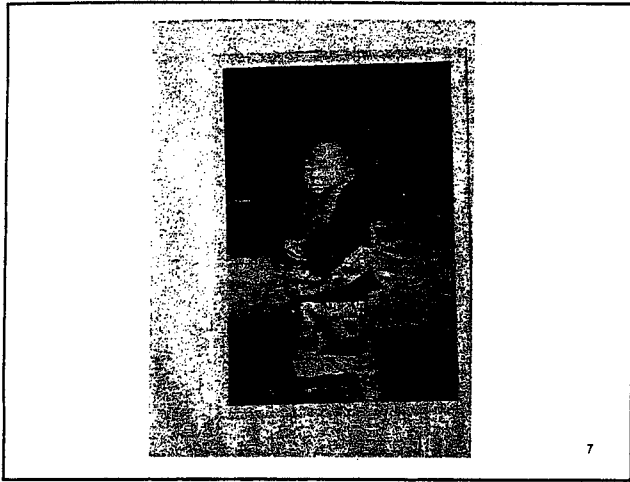
- ①終戦後間もない時代で、モノは少なく、衛生状態も悪かった。
- ②ベビーブームの時代であり、現在50代後半～60代に当たる団塊の世代はこの時代に生まれ、その子どもたちは20代～30代になっている。
- ③家族は多世代同居世代が多く、家族成員数も多かった。
- ④当時の社会では地域共同体が残存し、並行して、アメリカに追いつき、追い越せという「繁栄志向性」が「文化」として機能していた。

4



5





昭和30～40年代までの日本

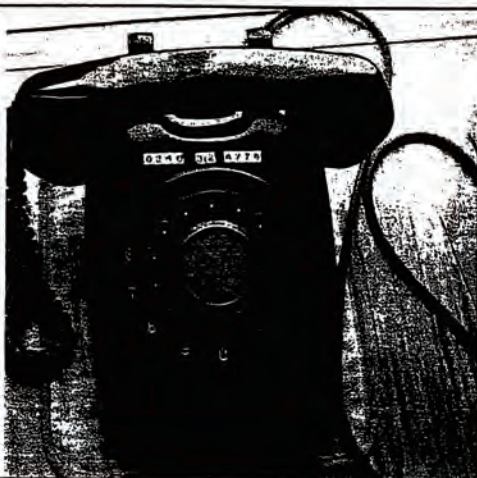
- ①農業が生活の基盤であったが、徐々に工業化が進展し、経済も上向きになり、家族の形態も多世代同居家族から、核家族への変化を見せ始めた。
- ②都市部での文化と、農村部での文化に格差が広がり、新型文化と旧慣文化との間での軋轢(ヨメー姑葛藤など)もしばしばみられた。
- ③経済的な発展と、旧慣文化が併存していた時代であった。

13

昭和50年代以降の日本

- ①核家族化が進展し、生活基盤が農業・工業から第三次産業に移行し、テレビ・電話などの家電製品をはじめとする「外部からの情報」を家庭に流入させる機器が普及し、家族の境界線が薄れた。
- ②高学歴化が始まり、大学進学率が上昇した。並行して青年期は、旧い文化の否定と自分たちの「若者文化」を作り出す場として機能することになった。

14



15

社会の変化から見る子どもの変化1

- 1950年代:戦後の貧乏期、まじめさがもてはやされる時代、生活型非行、残存するイエ制度とそこからの出立の挫折としての分裂病
- 1960年代:高度成長の開始(モーレツの時代)、三種の神器(テレビ、冷蔵庫、洗濯機)、マイホーム、核家族化の進展、学生運動(60年安保)、登校拒否の散見

16

社会の変化から見る子どもの変化2

- 1970年代:ニューファミリーの登場(少子、核家族)、専業主婦の割合最高、神経性無食欲症、退却神経症、家庭内暴力の顕在化
- 1980年代:バブル経済、新人類、やさしさ、自分らしさ、神経性大食症、いじめ、校内暴力、フリーターの顕在化
- 1990年代:不況の時代、超個人主義、カルトの時代、ブルセラ・援交、切れる子ども、ひきこもり

17

社会の変化から見る子どもの変化3

- 2000年代:情報過多(IT)の時代、ケータイの普及、情緒の喪失、解離性障害、ひきこもり、軽度抑うつ、非行などの顕在化
- 1970年代に日本の社会と文化は大きく変化し、家族も子どもも大きく影響を受け、それが情報産業の進展に基づき更に加速されて、現在に至っていると考えてもいい。

18

1970年代からの日本の変化とは何だったのか？

- ①1950～1960年代の「精神分裂病」はイエからの出立と挫折が発症のきっかけだった。
- ②伝統文化としてのイエは個人にとっての大きな圧力であり、父親ないしは母親からの支配からの脱出が当時の日本の若者のテーマであった。1970年代での神経性無食欲症の発症も「母親との共生を巡る葛藤」「男性社会に対する女性性の否定」が主な原因であった。つまり臨床症状を発症させるのは伝統文化に異議申し立てをしようと試み挫折した子どもであり、青年であった。
- ③1970年代でのニューファミリーの成立はそのようなイエの重苦しさを捨て去る一つの社会実験だった。

19

- ④ニューファミリーが目ざしたものは「イエの圧力を離れた自分たちの家族」であり、その背後には「やさしさ」志向があった。「やさしさ」とは傷つけず傷つかない、という軟らかな人間関係と、世間体・権威主義に支配されない「個人主義」を志向するものであった。
- ⑤しかし1980年代のバブルは「傷つけなければ何をしてても良い」という欲望充足的な生き方を選択させるきっかけになった。「個人主義」は自分の欲望を満たすこととほぼ同一になった。

20

- ⑥1990年代に至りこの傾向は加速し、家族はバラバラの個人がそれぞれの欲望を満たす場所に変貌し、情報化(携帯の普及、家庭へのコンピュータの侵入)がそれに拍車をかけた。
- ⑦しかもその生活はネットや携帯による仮想現実依存することが多く、家族は具体的な「けんかや軋轢があっても長続きする対人関係」を学習する場所ではなくなってきた。ネットや携帯は「家族内での軋轢を家族外に発信することで擬似的に解消する手段」として機能した。家族内での軋轢に対する「癒し」は「外部」から供給されるようになり、「癒し」も消費の対象になった。

21

「ALWAYS 三丁目の夕日」にみられる昭和30年代の日本人

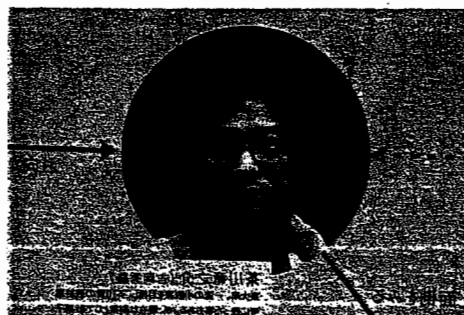
物語：もはや戦後ではないといわれた昭和33年の東京。集団就職して来た娘、小説家をめざす男、親の借金で身売りを余儀なくされた女性、親に捨てられ行くあてのない少年、就職してきた娘の住み込む鈴木オートの家族たちの間に繰り広げられる人間模様。物語の進行に伴ってできあがっていく東京タワーが印象的である。



22



23



24



25

ALWAYSをみて感動したこと

- ①妾の息子で母親に捨てられ、誰も引き取り手がない小学生が、邪魔にされながらも自暴自棄にならないで生活していること。
- ②空襲で妻子を失った医師が酒場の女にちょっかひも出さずきれいに生きていること。
- ③酒場の女が、小説家の男からもらった「見えない指輪」を夕日にかざして生きる糧にすること。

26

ALWAYSに描かれたかつての日本

- ①終戦から13年。「もはや戦後ではない」のことばのもとに日本全体が繁栄を取り戻そうとしていた。
- ②戦争で丸裸になった人たちは「持っていないこと」を当たり前として受容していた。
- ③「家族」「愛情」などの「物語」が機能していた。
- ④「ことば」が「象徴」として機能していた。

27

現代の子どもたちがかかえる諸問題

- ①家族や学校といったこれまでは基本的な準拠集団であり、そこでの絆は切れない、という感覚は現代の子どもたちにはかなり薄い。これは70年代以降に家族を形成した「親」の側に「個人主義＝家族・組織からの自由」が潜在しているからである。
- ②親の側には、自分になれる場所・相手を捜す能力はまだ備わっている。それは仕事でも良いし、趣味でも良いし、愛人ですらあるかもしれない。つまり親の側には対人関係を維持していこうとする能力と力強さは弱いながらもまだ備わっている。

28

- ③現代の子どもたちは、生まれたときからテレビ、電話、コンピューターがあり、仮想現実と数え切れないサブカルチャーに取り囲まれている。

しかも親は自己実現に忙しく、子どもに現実的な対人関係を教える暇がない。現実的な対人関係とは、食事を作る、洗濯をする、掃除をする、ということ子どもと共同して行うことで、日常生活を維持(生産)する基本的な訓練と、共同作業を成し遂げたという仲間意識＝家族という共同体の担い手であるという共通意識＝を持つことである。子ども達は家庭では得られない共通意識を「ネット」「携帯」で代理的に入手している。

29

- ④しかし子ども達が現実的に依拠しようとしている現代でのITによるコミュニケーションは文字や音声・映像重視であり、そこには生身の対人関係はない。信じられるものは「(現実体験に基づかない)ことば」のみである。

- ⑤ことばは対象そのものには決してなりえない記号である。しかも、ことばはところを必ずしも代理しない。それがいつの間にか「ことば」は万能であるかのようになり、「ことば」による断絶は人間関係の断絶を意味するようになった。

30

⑥「ウザイ」「ダサイ」「キモイ」「キレル」などのことばは、自分がある状況の中で体験している「感覚」の表現であり、感覚を表現しているからこそ、ことばは「真実」であるという思いこみが出現した。

⑦しかし、自分の感覚のみを表現する手段としての「ことば」は、幼児期的自己中心性の表現である。

31

最近の若者ことば

オニデン: 鬼のように電話すること＝かける方もかけられた方も衝動性が高まっている状態

ムズイ: 難しい: 分からないという困惑

ヤバイ: とてもすごい: ことばでは言い表せないという自分の言語表現の限界を超えた状態

メテン: 目が点になる: びっくりした状態

ハズイ: 恥ずかしい: 自分が予想より際だってしまった困惑

32

信頼できるものは自分の感覚のみ

①短縮化され、カタカナ化された若者ことばは、彼らの個人的な感覚を表現する道具としては機能している。

②しかし「言語」には単に個人的な感覚を表現する機能だけではなく、論理性・物語性を構築する象徴としての機能があることを忘れるわけにはいかない。

③論理性に結びつく以前の段階で若者のことばの機能が停止していることは、彼らが「感覚言語」以外でつきあわなければならない「他者」との関係性を持たないで生活してきていることを意味する＝自己愛の肥大化

33

「物語」の重要性

①ALWAYSの中では、貧乏で指輪を買う金なかった小説家が酒場の女への結婚申し込みとして「指輪の箱」だけ贈ったが、それで彼女は十分満足した。

②個人的に報われない生活を送った女性ではあったが、それだけではなく、「そこにはない指輪を贈られる」という行為が、「愛される」という物語の象徴として機能した。

③愛や生活とは「物語」を共有することだった。

34

「物語」を「真理」と言い換えてみる

ー木村 敏によるニーチェのニヒリズムの解釈ー

『生命の生成そのものは、どのようにしても認識の真理にとって接近不可能である。生成にとっての真理などというものはあり得ない。真理を可能にするために、力への意志は「生成に存在という性格と刻印」し、存在者という仮象を虚構することによって真理という名の誤謬を構築しなければならない。』

真理という最高の価値を無効化するニヒリズムは、実は生命の営みそれ自体が力への意志として作用するところに必然的に現れる生命の影なのである。』

木村 敏 「偶然性の精神病理」1995

35



36



37



38

アダルトフィギュアでの「力への意志」と「ニヒリズム」

フィギュアの素材: 生命それ自身

アダルトフィギュアを一生懸命作成すること: 生成(力への意志)

完成されたアダルトフィギュア: 真理(虚構)

ニヒリズム: 制作者自身が一生懸命作成したものは、しかし完成した途端、只のおもちゃとなり、商品としてネット上で売買される対象にか過ぎない。

39

現代はニヒリズムの時代か？

生成とは、ある状況の中に埋没し、そこからの差延を通じて虚構としての主体が形成される過程である。そこには時間的な「時熟性」の存在が要求される。ニヒリズムはこの過程にかかわる「力への意志」が内在しないところには成立しない。

しかし、若者ことばに見たように、現代では即座に自己の感覚を「言語化」するシステムが整っており、生成の過程を経ないまま表出され、垂れ流される。これはニヒリズム以前の問題である。

40

時熟

時熟とは、ある体験のさなかに一旦埋没し、やがてそれを「過去化」できることで、体験を「体験済み」にしたという「時間の重み」を背負った主体(虚構であっても)として成熟すること

体験を共有し、共に「同じ過去」を有しながら成長したという共通感覚は、人同士の結びつきを「物語性」という観点から強めうる。

41

時熟を伴わない自我は空虚である

時熟が成立するためには生成それ自体が持つ「力への意志」が前提である。

巷にあふれる感覚的な言語・消費されるモノ・外部から評価された自己像に単純に自分を当てはめる経過をたどると「生成」そのものが起こりえない。

生成のないところには時熟は起こらず、その結果たゞ虚構であろうとも主体としての自我は(時間的成熟という意味で)脆弱になる。

42

脆弱な自我は、

- a) 傷つきの恐れひきこもりに至る(回避性)か、
- b) 強さを求めて仮想現実での攻撃性を身にまとい、過剰に攻撃する(反社会性)か、
- c) 自分を受け容れてくれる相手を求めて刹那的に行動する(境界性)か、しかない。

これらに共通するのは、他者に出会えるだけの成熟した自我を持たないために、「他者との間で共通の物語を作り出す力に欠けること」。

現代社会の過剰なサブカルチャーは感覚的な自己中心的な物語(妄想とすら言える)の形成を促進するが、それを共通のものに展開させる「他者を前提にした論理性」に欠ける。

43



44

浜崎あゆみの「GAME」

ほら少しずつあなたの残した温もりが溶け出して全部消えたらこんな体は何の意味を持つかな

衝動が重なり合って出口のない迷路にはまる

ふいに襲う現実達が抜けだせる道を探す

なのに何故不思議なくらいこの場所を離れられない

明日の今頃にはうまく笑える そうまるで何事もなかったかのように

だってそうやって歩いてきたのにこのゲーム思うように操作できない

もし何か口にすればその瞬間すべてはただ砂のように指の隙間すり抜けて

しまいそうで時間だけ呆れるくらい平然と過ぎるのを待つ

明日の今頃には忘れてるようなその場しのぎの言葉なんていらぬ いつも

より少し長引かせすぎたの 大丈夫ゲームならまた探せばいい

言って きつと痛みだなんて幻想だって

言って こんな私だなんてらしくないよって

言って じゃなきゃ温もりをまた求めちゃうから

45

この歌から分かること

- ①とにかく失恋したらしい
- ②恋人との温もりがこの人の存在理由だったらしい
- ③失恋の痛みを感じてはいるのだが、それに直接目を向けるのではなく、「恋愛」は主体と主体のぶつかる「ゲーム」として捉えたいらしい
- ④対人関係は「ゲーム」であると割り切れない人間的な孤独感がこの歌を支えている

46

主体であるとはどういうことなのか？

- ①1970年代以降の個人主義は「主体」であることを求める生き様を要求してきた。
- ②GAMEにもあるように現代では、主体的であることは対人関係を演じる主体であることと了解されている。
- ③しかし「対人関係」は互いに互いの気持ちを了解しあい、共通の物語を作ろうとする能動性に支えられていなければ成立しない。
- ④現代では、「個人の感覚」が優先的に機能しており、感覚を表現する言葉を操ることが「主体性」であると認識されている。しかしそれは快・不快に重点を置いた関係性のみを作り出し、共通の物語を作り出すまでには至らない。「生成」の過程が対人関係の基盤に欠けてしまっている。

47

NHKテレビの「笑い」の話

- ①学級崩壊状態にあった小学校の担任の先生が「笑い」をテーマに詩を書かせた。
- ②最初は下ネタばかりでクラスが笑っていたが、繰り返すうち、以下のような詩が出てきた。
「今日はお母さんが仕事で遅いので私が卵焼きを作ってお母さんの帰りを待っていた。帰ってきたので卵焼き食べて、と言ったら、お母さんはこんなの食べられないわと言ってゴミ箱に捨てた。私はとても悲しかった」
- ③笑い(生成)を通じてクラスの和(物語)が広がり、やっとホッとして話しても良い場にクラスが変わった。この詩が出てから子どもたちの悲しみが詩に表現されるようになり、クラスが落ち着いて(クラスという物語の創成)。

48

ホンネで話せる場所としての家族・学校

- ①子どもたちは家族でも学校でも「よい子＝迷惑をかけない子」を演じているのかもしれない。大人は子どもに「演じる主体」であることを求めてきた。「自分のことは自分で」といいながら基本的に生活を共にすることを大人がやってこなかった。
- ②その結果、子どもたちは「自分」を表現できる相手としての「親」を持てず、「感覚言語」のみを身につけた。「感覚言語」は自己完結的であり、未熟な妄想を作ることはあっても他者と共有できる物語は作れない。

49

- ③基本的に家族は「何気ない話ができる」場所である必要がある。日常生活を共同で営みながら、その共通体験（「生成」の場所）に基づいた会話（物語）ができないと家族としては機能できないことになる。
- ④子どもが「ホンネ」で話せるように聞き役を努め、しかもそこで語られた自己中心的な物語に歯止めをかけ、共通の物語にまで仕立て直すのが親や学校のつとめの一つである。

50

症例：神経性食思不振症

- ①南会津郡出身 18歳女性
- ②3人兄弟の長女、下に妹・弟
- ③小2の時、父親の勤務先の会社が倒産、それを機に南会津郡の父親の実家に家族で転入。それまで二人暮らしだった祖父母はあからさまに子どもたちに「うるさい、お前たちなど来ない方が良かった」と言い、妹、弟は反発したが本人は祖父母につくした。

51

- ④祖母と母親の仲が悪く、母親はいつも長女に愚痴をこぼし、長女は小学生の頃から母親をかばい、母親を支える役割を果たした。
- ⑤高校生になり、将来の進路を考える時期を迎え、「わたし」について考えたときに「いい子」としての自分しか持たなかったことに気づいた。その時点で自分の存在理由が分からなくなり、「食べよう」という気すら起こらず、体重減少をきたし、月経停止した。近所の産婦人科を自ら受診。ホルモン剤を処方される。
- ⑥家族カウンセリングを受けようと思い、相談。

52

- ⑦カウンセリングの結果、「自分は祖父母のもとを離れ、父母兄弟だけで暮らしたかった」ことを父母に告白した。
- ⑧父母は驚いて、引っ越しを決意。この時点で症状が緩和される。
- ⑨父母は引っ越しを祖父母に提案。祖父母の態度がやや軟化する。
- ⑩現在引っ越しは行われていないが、本人は月経再開。家族の雰囲気明るくなり、弟は祖父の家業の豆腐屋の後を継ぐつもりになった。

53



54

この例で言えること

- ①会社が倒産した父親、母親は自分たちの生活を支えるのに精一杯で子どもたちの感情に気づけなかった。
- ②農村部にある父親の実家では嫁一姑葛藤が色濃く残存していた。
- ③症例はその間を取り持ち、自分を殺して「いい子」になっていた。青年期になり「自分」が空虚であることに気づき症状を発症させた。

55

- ④自分の望みが「家族水入らずの生活」であることに気づき、それを告白できる勇気を持っていたことで親の対応が変わった。
- ⑤親が転居を言い出したことで、祖父母の態度が変わり「子どもたち家族」への見方が変わった。
- ⑥子どもが症状を発症させた原因が自分たちにもあったことに気づいた親の「子どもを守る姿勢」が転機をもたらした。

56

子どもは訴えたい

- ①現代の子どもはいい子・強い子を「演じる」ことには長けているが、本来的な「自我」は成熟していない。
- ②元気な子どもを演じていてもえつきたり、引きこもったり、過食・嘔吐したり、非行に至るのは、社会・文化の大きな流れと、子どもの「自己中心的な物語」に歯止めをかけられない「個人主義的な親」の相互作用に原因の一つがある。

57

良い聴き方とは？

- ①真正面に向き合うよりは少し斜めか隣に。
- ②「うんうん」「なるほど」「あはは」などのあいづちを。
- ③相手の話の大事なポイントを押さえて繰り返す。
- ④相手が「言葉にしていない」ところを「明確化」する。ただし偏見による明確化は不適。
- ⑤自分の価値観を出すのは一番最後。とにかく話に耳を傾け、最後に「別の見方」を提示する。
- ⑥一日一回子どもの話を10分間聴く。
- ⑦子どものプライバシーをのぞき見しない。
- ⑧子どもの「困った」話に過剰に反応して不安になったり無理に解決を図ろうとしない。

58

おわりに

- ①家族とは「何気なくそれぞれが歳を重ねていく場所」
- ②歳を取るというのは年齢を重ねるのではなくて、日常の体験を共有し、共通の過去を有すること。
- ③体験を共有することで「ホンネ」が出せる間柄を作ることができ、参加性や忍耐力・対人関係能力の基礎が身に付く。
- ④子どもたちの演技にだまされないこと。自分が子どもだった頃を思い出し、成長が早いのを喜ぶのではなく、基本的には支えが要ることを理解すること。
- ⑤それに基づき、子どもを一人の人間として受け容れること。「ダメ」「いい子だね」という前に「寂しいんじゃない？」「つらいんじゃない？」と声をかけてみる。
- ⑥それに基づき「新たな物語」を作る努力をすること。

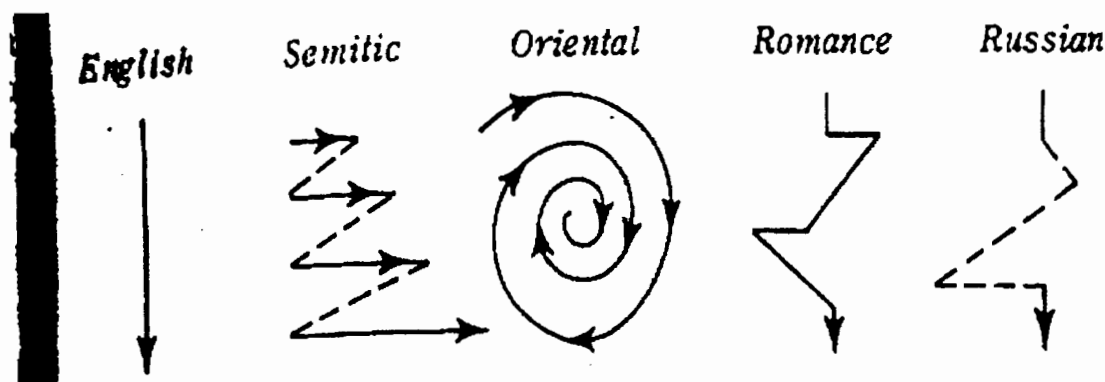
59

対照修辞論 (contrastive rhetoric) について—英語と日本語の対照を中心にして

医学部外国語講座 清水 研明

1966年に発表された、Robert Kaplan の論文 “Cultural thought patterns in inter-cultural education”により対照修辞論が誕生したと言われている。Kaplan はその論文の中で、各言語の修辞構造はその文化に特有であり、アメリカで外国語、或いは第二言語として英語を学習している、英語を第一言語としない学生が書いた英語の文章には、それぞれの第一言語の修辞構造が影響を与え、英語の文章としては欠陥のある文章になってしまっている、と述べている。

ここで言う「修辞構造」とは、パラグラフのようなテキストの構造を意味し、Kaplan は、この論文では各言語のパラグラフの修辞構造を比較している。各言語のパラグラフの修辞構造を「線」で表現したのが次の図である。



後で批判されることになるが、Kaplan は当然の如く、英語の修辞構造が基準であり、英語の基準からの逸脱は、取り除かれなければならないと考える。基準となる英語のパラグラフ構造は演繹的パラグラフである。「直線」は、トピック・センテンスで表された主張が直後の文によって支持されることを示している。

さらに、Oriental languages では、渦巻き状で示されるパラグラフ展開が一般的であることが示されている。しかし、この論文では、中国語とハングルが Oriental languages であり、日本語を含まないことと、Oriental という言語学では使われない用語を使ったことが批判されることになる。

この「渦巻き状の曲線」は、明らかに「起承転結」スタイルのテキスト構造を示していると思われる。すなわち、トピックが冒頭に示されても、トピックに直接関係のない情報が示されたり、先行する情報から直接得られるとは思えない結論が示されるなど、トピックについての結論が最終的に得られないテキスト構造を意味する。

英語の演繹的パラグラフがほぼ独占的に使われるようになったのは、それほど遠い昔の話ではない。E. J. Hays は、南北戦争以前のアメリカの大学教育の現場では、帰納的パラグラフが

むしろ一般的であったと主張している。

南北戦争以前のアメリカの大学教育は、政治家と宣教師の養成所という様相を帯び、相手を説得する修辞技巧が重要視された。それは、幾つかの例を挙げて、そこから一般論を引き出す、帰納的な論理展開がより有用であると考えられたからである。しかし、19世紀後半、アメリカの産業は序々に成長し、大学はかつてのような政治家と宣教師の養成機関ではなくなり、産業の発展を担う中流市民の仲間入りを望む学生が多くなった。

人を説得する必要より、科学知識を伝えることの方が重要視されるようになり、それには演繹的パラグラフがより相応しいと考えられた。先ず科学的事実を伝え、その事実の正当性を示す文を後続させるパラグラフ展開が重用された。古典的修辞学が学校教育のなかで力を失い、古典的修辞学の素養のない大学生に対しては、演繹的論理の方がより教え易いと言う事実もあったようだ。

Kaplan などの主張に対し、その英語至上主義や、その裏返しである、英語以外の言語に対する固定的な言語観が批判を浴びた。日本人である久保田竜子は、潜在的・顕在的に示される英語至上主義を批判し、さらに、起承転結が日本で優勢な修辞スタイルであることを前提とした対照的研究の有効性をも疑問視する。日本語研究者である John Hinds は、Kaplan の主張を受け継ぎ、起承転結スタイルの日本語テキストを論理的ではないと批判したが、久保田は、日本語に限らず、中国や韓国でも、アメリカで一般的な演繹的なパラグラフの影響を強く受け、起承転結スタイルの段落は既にそれほど優勢ではないとしている。

久保田は、アメリカの外国人学生が、第一言語である母語固有の修辞構造を排除して、英語の修辞構造を身につけていく過程を「脱文化」(acculturation)として捉え、英語以外の言語固有の修辞構造を、英語の修辞構造と同等に捉えるべきだと主張する。

英語の修辞構造、特に、科学論文の修辞構造が演繹的パラグラフにほぼ統一されている事実は、大半の、非英語を母語とする者には、当然の如く受け入れられているが、当のアメリカで、より説得的なパラグラフ構造として帰納的パラグラフが優勢な時代があったことを考えると、現在の演繹的パラグラフの圧倒的優勢は、絶対的なものではない。

批判されることの多い「転」と「結」の部分を修正し、より広範に受け入れられるように起承転結スタイルを変えることも可能であろう。古代ギリシャの修辞学から伝わっている帰納的修辞構造、さらには、西洋修辞学以外の伝統を持つ修正された起承転結スタイルを含めた、複数の修辞構造が並立し、書き手が目的に応じた修辞構造を選べるのが可能な、修辞的に健全な(rhetorically healthy)時代の到来が待たれる。

主な参考文献

Connor U. (1996) *Contrastive rhetoric*. New York: Cambridge University Press.

Hays, E. J. (2003). Alexander Bain's long shadow: The current-traditional paragraph in the classroom. *Midwest Modern Language Association Meeting*, Chicago, 8 November.

- Hinds, J. (1983). Contrastive rhetoric: Japanese and English. *Text* 3(2): 183-195.
- Kaplan, R. B. (1996). Cultural thought patterns in intercultural education. *Language Learning* 16: 1-20.
- Kubota, R. (1999). Japanese culture constructed by discourses: Implications for applied linguistics research and ELT. *TESOL Quarterly* 33(1): 9-35.
- Kubota, R., and A. Lehner (2004). Toward critical contrastive rhetoric. *Journal of Second Language Writing* 13: 7-27.

編集後記

『総合科学研究会報』の第4号が出来上がりました。今回は昨年度後半2回分の記録を掲載いたしました。今年度の記録は第5号以降で順次お届け致します。

これからも、年4回を目安に勉強会を開いてゆくつもりでおります。どなたでも参加御自由の研究会です。会での話題提供の御希望は随時受け付けておりますので、下記連絡先までお気軽にお申し出ください。

総合科学研究会報 第4号

2006年9月吉日発行

編集・発行 福島県立医科大学総合科学研究会
〒960-1295 福島県福島市光が丘1番地
福島県立医科大学医学部人文社会科学講座内